

《今朝の聖書から》 “神の国はいつ来るのかと、パリサイ人が尋ねたので、イエスは答えて言われた、「神の国は、見られるかたちで来るものではない。」(20節)”と書き始められています。この間についてみましょう。“天国”って、どんなところだろう。“どうやって行くのだろうか”などと思うのは、イエス様に逆らおうと考えてはいなくても、それどころか、本当に神の国への道を歩むことが許されているクリスチャンにとっても、同じなのではないでしょうか。反対に言いますと、教会も神様も問題にしていない人にとっては、天国などということに思いを巡らせるということはいらないでしょう。21節に、その答えがあります。“『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ。”というのがその答えです。“あなたがたのただ中”そこには何があったのでしょうか。そこにはキリストがおいでになったということになります。“神様の国”は、私たちの理解の範囲内の過程・筋道を経て、その制度まできちんと説明出来るような、物質的なものでもないし、制度でもないのです。けれども、イエス様の時代から今日まで、実に沢山の人が、“イエス様の方からやって来てくださる”ことによって、神様の国を経験しています。私達も、語られ、読まれる御言葉によって、 sacrament (聖餐と洗礼)によって、繰り返して神の国を経験しているのです。私たちが思いをめぐらせ、あたかも、経験したかのように、神様の国を信じるまで、イエス様は私たちに伴ってくださるのです。32節以降に進みましょう。“自分の命を救おうとするものは、それを失い、それを失うものは、保つのである。”とあります。一体どんなことでしょうか。私たちは、自分の命を守るために、家族を守るために、職場を守るために、実に多くの努力をします。重要なのは、“キリストにあって”これらのことに堅実に努力するという事です。偽の預言者の手品のように神の国は現れないし(23節)、神の国がやってきたなら、どんなに、身を守る準備や人間関係・利害関係を作っても、一人一人のところにやってくる神様の国は、これらの強固な関係にお構いなく、救うものを救われるというのです。そのことを、ノアの箱舟の時に起こった出来事(26~27節)と、ロトの出来事(28~29節)を通して説明されます。“何時くるのですか”に続いて、“どこに来るのですか(37節)”に質問を変えても答えは同じでした。主の必要なとき、必要な所にそのことは、救いとして体験されるのです。

週報

2007年 10月 14日



主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます。
使徒行伝16:31

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

教会学校	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル会の会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp

牧師 村上定幸